

物
見
草

D
1172

逍遙文庫
文庫6
697



新編 源氏物語
序



序

抄よと稗史小説の序詞を完きたるにせし
めき勅善懲悪城をくくやんよの夏日冬
乃眩魔を破るをりて有る守りよを
美のにおもむきかほきよもその程を必きた
るれよこの小冊とすこ曲亭子の八大橋よ
りてはよ其ゆえんのころる城を築き
忠伝節操奸悪殘忍ありその人物を



文庫6
697

好格を風流—おれ—の友垣—贈—んと
きは蘆明菴—老—心—出—し—は—き—は
えむ人—よ—く—其—白—を—解—し—能—風—流—の
者—を—味—ひ—な—い—多—に—を—解—城—消—き—は—乃—と
な—ら—て—や—も—と—其—中—よ—あ—ら—舞—と—以—布—

又久—と—初—秋

ま—青—居—人—後

卷一

附言

今や八丈傳の學—限—なく—あ—つ—つ—う—へ—に—其—中
の—の—実—人—物—乃—快—態—も—あ—ら—し—し—知—る—ま—ら—し—し—と—秘—す—と—
は—き—し—し—の—い—も—も—際—報—や—も—も—ん—と—な—り—し—
唯—の—文—を—書—出—し—ば—は—ら—る—た—お—く—西—謂—肝—胆
な—ら—ん—も—は—ら—る—事—を—善—友—の—案—を—り—後—白—と—秋—を
乃—題—を—も—て—せ—し—も—好—多—あ—ら—し—し—決—家—と—も—に
暗—記—の—た—ら—し—り—あ—ら—し—く—さ—ら—れ—よ—も—只—其—の—安—情—を
う—つ—き—を—も—て—も—の—あ—ら—し—し—あ—ら—し—し—あ—ら—し—し—
か—ら—し—し—あ—ら—し—し—且—人—物—と—結—局—の—書—し—し—を

跡くも揚人ときまはすこやう多輝よりて
いづらみ衆城を焚きつゝと依てつゝと初輯等
一回義寧父の遺訓をもちて結城の圍を乃れ
山下定包を討く房胤は基を崩くより第九輯百四
矢に親と南仁富山は四個の勅冠を柱くつゝやを
あゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝと
何うて出吟をなすもあれまはり終るもすれつゝは
つゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝと
乃あゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝと
穴

い乃とつと

○里見義實

藺相如の勇をりて夜光の珠いさか
もとむかへつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝと
す犬いさ身の仇なりき

飼犬いさを鳴もつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝと
為山

里見義成

弱冠なれも文学武畧父祖小劣らも
と民を撫國を治めて南總の藩屏を
おろつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝとつゝと
茂之雄

里見義通

豫准備の雜兵を義通君に縛縛て
布囊を衝せし城樓の柱に扭着て

身をせたくてなく言忍ふれ父慈し山英

安西景連

思ひよりなき義實の年の若きに
悔めて打見しその礼をかへさず

梅の空乃ふくみももよあしきと篤之

山下定包

滝田の城を更めて王下とこれなる
王梓を嫡妻とて後堂に冊を

みくあよきとひる人夢やと樹石

畠田素藤

茲事成就せん日まで高量敵にせま
あよとまきよの妙椿を城内に留めて
敢外に出さず

月よりそらみ橋かものこれ五休

扇谷定正

音領定正達ら敵に背を見ざる
よれけしそ復そ忠與怨の征箭
を受てもふと厚しめ

あよあらしあふれそえ接うを稔市

○杉倉氏元

天の晴ても甲夜割小月待とる途
の便なき心類は集燥のせせんも
なるまゝ水行と

筆端くくくくはくくはく翁と舟 只青

堀内貞行

飯を炊せむに雷雨烈くなま
ふおのひは彼処お目をくらくか
如く遅恭せり

おら程ても船をかまほそ月見え 呂風

金碗孝吉

爹まま喃と声立て呼ま親いえ
はくも物のいひけり動せし唇の色
変りつ

日くほくく雨くきなりく百会乃花 白起

蛭崎照文

安房上總の南嶋の尽処み
賢を招くに普くことよりて某主君
の密説を奉りて封疆を出て英士
を募り

忠くたえ月をむかへぬ 旆森可れ 新甫

簸上宮六

式歌故実歌志ねるも我熱醋
を飲せし情なと怨されい

嬌いしはさしとてとあるを燈籠虫 永年

軍木五倍二

肉を夾められ無情や鮓の非を
煮ては黒ずた灰凍る東葉を
ひらめくまこり

るうあひの料理かしく月見水 只青

姨雪与四郎

過世の業因深き故や死まう色
を得死して子供を撃し

刺相應る合巻

老うしとせき松つし松の花 草友

十丈力二

二箇の色を共侶ふ披きてえねは
こいたん顯れ申男の斬首

毛をすく世寒くもくろ相一巻 篤之

十丈尺八

忽地聞ゆる苦惱の両声焼と燃る
鬼燐の光りふ再び登る婦女輩

肥よしむ花火やあかいろよよ丸 留木

馬加常武

何を破見うけさうけよまひ魂
言まもあれも折うた四天王等を
召よて酒を飲せよ

能燭よ酒の多しやし竹むら 完結

籠山縁連

刃の光りた身を反も毛野持る
猛虎の頸りて楚と受住れいなを
撃んとまこ振抗る刃も先ら首級
の撃眼

すのいさくほのみき枯ぬ松の若 禾曉
泡雪秋實

起んくさる背膈席薦の塵埃を
拵らう如くこれ彼存一打居られ

おろもせくちをなせよまきくらきたる
稲戸由克 涼花

首函引よせ共侶は蓋を撥遣り左見
右見て寔小是の記憶ある那莊奴よ
疑ひな句 是は正しく犬田小文吾

芋の葉を蓮とらんせは工支るを 教行

川鯉守如

町寧小機密を漏らさ長き示て
遠く懐より紙小糊る金十兩と

種子嶋の小銃を出て

嘗乃大子初音りり

稔市

川鯉孝嗣

二町を先もて昇り親の亡骸の
轎子小走着んと一鞭中なる武者態
を逆目送る莊小文吾

も城あゆむに

ト早

太田助友

蓬き敵の逃足小武士の作法もいら
はこそ思ひ無益の向答ならきごとく
踏込て討捕きと烈き下知

先隊の雑兵

犬養をよめてはつよみや青嵐 思案

○犬塚一成

死期遠くぬ親の瘦腹今面に
かき切て汝を姉小托んき

菱もめて乃つよみや名の本が 留本

細下左母二郎

墓六とてもこの焼及を認むああら
さる一室の山よ今なら他人の物ま
まきとひらひらひらを領き

巧なるまねしつよみや水馬 草友

水垣夏行

既^{既に}あて夏^か行^{ゆき}の大^{おほ}角^{かく}組^{くみ}伏^ふられ有^あ種^{しゆ}
い現^{いま}八^{はち}膝^{ひざ}布^ぬれて呻^う吟^{ごん}くのも夏^{なつ}復^ふ
さんと拵^{かた}扎^さとも

追^おま^まく^く秘^ひら^らひ^ひそ^そめ^めり^りお^お猪^ぶう^う家^か 月^{つき}よ

落鮎有種

心^{こころ}さま^{さま}ま^ま悍^{はげ}く^くて人^{ひと}の尻^{しり}馬^ばお^お乗^のるもの
か^から^らま^まよ^よく^く耕^{こう}農^{のう}を^を奨^{たう}めて資^し助^{じゆ}を^を
事^{こと}勤^{しん}く^くぬ女^{むすめ}婿^{むこ}養^{やしやう}嗣^しと志^しを^をりて

新^{あらた}畑^{はたけ}や^や子^こ芋^{いも}は^は芽^めは^は夏^{なつ}も^も親^{おや}中^{なかつ}に^に貫^{くわん}乎^や

○ 杣木朴平

原^{もと}来^{きた}ま^まく^く箭^や射^やて^て落^おせ^せる人^{ひと}啖^{たん}馬^ば

あ^あの^のあ^あま^まさ^さや^やら^ら謀^{まう}と^と夏^{なつ}の^の飛^と鳥^{とり}の^の鷓^し鴒^{やう}
の^の背^せと^と齧^か齧^かて

能^よ長^{なが}く^く杜^と丹^{たん}あ^あら^らせ^せ恨^{うら}み^みの^の教^{しやう}行^{ぎやう}

洲崎無垢三

志^しの^の剛^{ごう}な^なれ^れも^も彼^かれ^れ梟^{せう}雄^{ゆう}の^の智^ち小^{せう}
勝^{かち}ち^ちと^とあ^あら^らせ

う^うら^らあ^あて^て事^{こと}く^くく^くく^くあ^あら^らせ^せる^る 稔^{しん}市^し

大塚墓六

鮮^{あざ}血^ちの^の泥^{どろ}尾^びを^を曳^ひく^く龜^{かめ}篠^{ささ}四^し肢^しふ
墓^{ひら}六^む逃^に迷^まひ^ひ蛇^{へび}追^おう^う七^{しち}轉^{てん}八^{はち}倒^{たう}

枯舟あらしき獲りも菊をさるる 貫乎

糠助

心かまひ在らむ人も人よ告さるるまに
の夏つと某原の安房の国

暮れ口のつとつと 棍乃命りも 五休

古那屋文五共衛

一波動きと萬波皆従ひ細鱗踊て
巨魚あるを志る樂らうまに央かまふ
とらんれあやまき放舟

沙魚初やわらわとささくもよま後抱 太年

山林房八

莊官屋敷小捕りま 親の縲縄を解
んとたつ八信乃を搦めて吾倚小渡せ

とら生んとむとさ地えとる吉野梅うも 永年

依

額の素まら亡者の被る地藏楮もや
あゝんまらん背の高き一袂の包物を
負ふなり

死かして存く迄出〜たり 船中 永年

暴風舵九郎

一最熱き松蔭より顕れ出る一個の
癖者頭小手拭の糾鉢巻を腰に

一口の短刀を跨

ぬきそや憎ふ敷板乃先ずらる 芳草

鷗尾並四郎

帳の釣緒を断落しつ登りかりし
小横の上より彼行色をささと刺き

ふらきく人たさすなり 鬼 薊 永年

四六城木工作

七九の命の邊より腹まで礮と撃抜
きこる両銃丸小要時得堪き

その花あつ下は伝き一 奈山ふは 花外

石亀屋次團太

地方の仕伎頭領と拵られて鬭争の
和説をたの立入らそといふ事なり

中しゆぬ流るれ治おもふおれ 波 崎

鯽 三

御下向の折を等て外あれゆきを
厳み示き詞の雨露の恩受る轍の
鯽三江は還りゆく不勝の歡ひ

露の筆を多をく人よ知く終る 稔 市

○念 成

太示四郎来さる前より彼縁頼ふ
出て居り曝背小心地より半半の

風を拾ひつ

長崎や虫の如く言はれりなごころ 五休

鎌倉壁

なまも 逃人と突立る杖は三尺五尺の
軀も浴せしめる郷武の刀の牙は
世の別路

生ゆらんよころまごころては白西瓜 思樂

○童子藪子酒顛二

門の戸烈しく敲かて主人次團太快
出よ 這里の宿せ 他郷の旅人

織物やこまごころ げもれ水溜ト早

媪内

今宵の拵まは是まをなごころ西個の
死骸を海流して牛を千住(牽きて
中んも身宿所(還りねじ)

生らるや残炮百合を花なごころ 花外

鷺鮮坊

麻布の方より忽然と癖者五名連
立来て沼の畔に立在るその中ひ一個の
癖者罩頭巾目昏み戴きて

おはねあつちよごころて来る本巻惜し 也大

○假一角

某とて其事を思ひたるに
旧体を露とて親に似たり
頭搔捕人の快くも

天差やうきそまはしくその姿 本年

牙二郎

試撃の夏まで知れば舎蔵
疑ひなき先踏込て引摺出さん

山極に命去りもや人々ほく 月夕

妙椿

齡千歳小近三鄙語ゆつ虚詐
八百欵面白く形瘦て雪を載る

吳竹の嬬すあて危くも

彦汁出へ味より色に蔽られ 湯山

○箴大刀自

首級と俱に三口の刃を大塚石濱の
両城内遣さん夏勿論なり津衛も
這義と心得よ

さそりゆ魚や去用の贈り物 新甫

蟹目前

心築石の遠くはと這里小北野の外な
らで幣とる神子の手小鈴をふる夏
多き庭竈

福多事乃月一もあはれを放生云 山英

濱路姫

道俗諸彦の庇ふより実の親も我も

も定ふなりし歡ひも就て悲し恥しき

やとそ本ともはくはらうよ知り老 教行

玉梓

殺ら殺せ兒孫まで畜生道も導き

て此世からなる煩惱の犬をなさん

凍程乃はくはらうと疎とさうらみは 新甫

○手束

親と親も許さる妹伏といはる

恥かかろう今目よりて存亡をわん

身と俱小せまあまき

板の以浦城ののまきとて程 手枕 去年

亀篠

彼種々の聘物を願ひてかきて打

微笑まおれりてこの結納や

餌のたえし身ももさうら小雀式 波臨

濱路

原来せん身いさうら家見欲仇ま

撃てのりさう思ひうけたまこぬ抱い

逢ふとこそれの今般の對面

夏深やあふら嬉しき雨の音ふ 数行

妙 真

僅小遺を榎の實のひらつとつて掛
替ゆなき孫さへ神ふ獲らぬを歎
くこのつまで待らんき

身や川の秋をわらぬをいさ言 芳草

沼 蘭

糸より細く目ひきき家兄も伏し
ま存命て世小憑き誠心を説
明さぬ幾條

うつくやえらるよちや草花 草友

音 音

熟ぬ手投お栲衾素樸片木の薪
樵る鑪倉遠き不樂僑居

美もやはひ お里より 老をいさ 白起

曳 手

切てりやう尻となりて良人の菩提を吊
きあつこの夏のを六許させり

新まてくくは涼しや青 芒 涼花

單 節

現う夢の一年半夢も逢ぬ良人の
只かたじと思ふる歎きの霧小袖の雨

もろくも病の悔し身を於秋の鐘 呂風

離衣

十九の厄を二期して非命小終る幸
なまも何憾むき良人の為小功あり

といふ事

山風此中よ伊くを女吊花 きく権

夏引

牝牡無慙の癖者亦素より佛地を
憚らぬ寒風袂て春心揺動き

過きぬむよととろくもや葉吹 完臨

重戸

大

況やろ六母刀自の忌見をりをおん憤
小紛れて忘れしひ故いそ登目まで
呵責を禁り

身よむや羨ととろくも夕のり 稔市

船魚

短刀晃りと引抜て右手小楚と小文吾
衣領搔り引着て吭を搔んと閃き

白はえや人乃油断城吹まろけ 樹石

○犬江仁

里見殿小宿因あり八犬士の随とる
名は豫知られる犬江親兵衛仁あり

あり住れちと喚りて走り出来る大童子

突かきよすりくくすんく山越き 溪高

犬川義任

下郎も亦五常あり主を撃てあそ
雙目送る法やある推なうて雌雄を決ん

義くくくく人やはたさく唐幸る 樹石

犬村礼儀

言ぢりや畜生と些の魔術が長なりも
竟お漏れぬ天の細父の雙妻の仇

正体をもくくくく斜る河豚の家 為山

犬坂胤智

はまり詠ふ笛の音小鼓の調打添て立そ
あられ巨岡野の態も體も美き

振袖と身をまのしるや花衣 花外

犬山忠興

眉の秀て遠山の如く眼は朗めて雙星お
似る隆準丹唇是る二個の好男子

くくくくくくくく優美あり恋のくくく 白起

犬飼信道

件の騎馬かゝる妖怪は左の眼を篋深よ
射らぬて一声苦と叫もあす

くくくくく二の矢とつゝす穂 稻 芳草

八犬白賛既成用卷之款
抄案而小待復賛之

犬誌元知純妙詞贊成俳句更新奇
彌腸個々吐名玉又波吟魂驚伏姬

世中文字題

海内名

善の教乃人トモ	如月垣根	公成
ちつ耳よ學字終	廣の船	有節
自すくらとと香月の物を下り河	蒼山	山
ぬる風し乾よ知るまの如草	漁藤	藤
綿弓跡きえるも長き雪の峰	島岳	岳
美しうの井しる事あや年の内	芥金	金
雪多跡の峯や小集のたり大	梅道	道

ささげの葉をよみ入る朝や露の糸 素 夜

帆のゆるゆるの穴あゝ波り水 知 風

ののどきるけいを手鞠唄 湖 水

掃洒る牡丹の心や料理屑 杜 崎

雲のうらみも出せぬ雪は思ひぬ 黍 丘

暗やまの雨の音やうきうき竹 梧 翠

八月や小やまのついでに梅の内 麦 冬

舞臺や夜やゆきと雪の細き 塚 城

手枕のふしとまのまのあまのこ 半 夢

静鈴のちよととんたんと水 禾 田

木立のうらみとまのまのあまのこ と 守

この秋と葉とのもみ菊を飛 夢 里

枯幹や山の手かりと道と所 柳 壺

入梅晴をまづや猿紅の鳥は種
形代やうーあーそら山流を川
まじくこの夕暮出ぬ一薄くれ
丹嶺 木圭 悠平

田くささる風をかきむや夏の上
よの月よあゝ涼しみや竹のゆき
と度とちる葉く管帯や宿の花
あゝ年をまはしむるまにまを磨り
鷺眠 清水 柳阜 契丈

石菖花を咲くまづ一花能
あまの羽をまきありのち揚る花
けり彩のまやめにほくや相高
喜まじくやまをみまうり深山
沖くく漁舟をくく雲のまひ
河津生たそ後よぬまてのあま
あやむくく群りましや親崖
市猿 遊古 吏川 五具 文貞 李朗 古棠

案ゆゆく抱く奥まで松魚火 童湖
出くけくく驚きとつらき初給 渭川
切干や糸を音を陰るく 雲倉
聖の古や藤このくく相乃花 赤沙
標なくや干くけくあるはらう布 省我
門折くはく玉卵杖やうくく足 其残

枝折の松葉の中や古乃群 而后

ゆ年や吹くくく波かーら 一清
水くく来る船川や花亦権 梅裡
其秋をくく水くく面はくく笑度 静夜
心く新涼くく星や葉のち 夢地

春の山をくくくくくくくく 完伍
二編くくく枝なくくく楮 蓮字
岸なくく借上くくく星 糸 柱水

わんこ 虹影うつる夏野こり那 嵐は
鳴やあふさる川と暮一秋の掬 青溪
清く水およぶと舟より中可虫 月栖

烟中や突をさう相乃冬木立 可轉
月影や蓮の葉結露の水の音 梨軒
泡雪紅氷のまへへ海よりあふり 樵山
魚と花をとりと水ききもや杜若 半雪

これ人のあはれ暮のあは清水は 一瓜

幹のくすむのちもれや牡丹畑 立宇
あつるよ機嫌直一と秋の雪を雀 為静

権一と田より月山松の如 瑛山
柔湯のあはれと連河や五月雨 蒼波
万葉の風をさうと堤の家 洗音

流きぬを水よりそゆる異この郡 什兮
 雨の百合そむあしくよききりて 一兮
 菊もあはれうつくしめ花より鐘 梅成
 永きよよたのめ出りたり山の百 芳塙
 花の露おそよのまきまも田其 風止
 流む新をあきふも先て五年鈴川 左竹
 夕作秋のそしめてさけ。柳の如 一止

雪きぬを花よりそゆる異この郡 市山
 雨の百合そむあしくよききりて 松圃
 菊もあはれうつくしめ花より鐘 其骨
 永きよよたのめ出りたり山の百 梅二
 花の露おそよのまきまも田其 精意
 流む新をあきふも先て五年鈴川 梅白

世

晴。物。知。き。一。星。や。子。規。此。一
 春。風。や。あ。く。ぬ。交。り。寄。居。中。売。錦。苔
 扱。中。の。細。の。水。輪。や。も。り。嵐。一。儼
 親。舟。の。馳。き。の。り。や。昔。の。月。之。吊
 空。の。空。の。り。樹。の。う。ち。を。初。馬。貫。之
 幸。し。事。の。見。れ。も。人。の。夢。の。れ。石。洗
 け。燈。燭。か。き。出。て。つ。つ。板。橋。水。里。挑

晴。ふ。す。桂。乃。真。り。水。輪。う。家。一。南。漢
 ま。の。魚。の。り。ぬ。あ。の。白。魚。菜。南。江
 家。あ。き。の。田。畑。と。と。と。守。一。古。音。峰。秀
 籠。抱。え。や。り。ま。の。雲。の。清。夢。水。柳。芽
 立。き。の。れ。を。古。い。と。と。と。ぬ。魁。う。れ。ま。の。起
 葉。の。あ。や。葉。の。も。ま。よ。ひ。の。つ。星。蝶。起
 朝。空。や。は。つ。の。つ。き。一。聖。業。市。正。波

苗とれと自慢の余心の菊見火 一 昂
空自やうし赤子 嘯る浦の天 掲 雪
種をほい耳に入るとはけら 鴉 己 有

仮摺を言を過ぎはけりら子 芥 雅
おりもまゝの戦くも捨てあはせ女房は ちや 権
日の光をほいとて伸て空を去 椿 山

長障紙瓦をぬき一月おくれ 乙 瓢
日よき事と色了持たれ瓜の花 奥 岳
老ぬきとふおつる拾いの程 朱 室
庭師もい蓋とて寸新酒の家 み 理
見なすて空とてつ移の巻火 潤 屋
まゝ風もほそい書て川原の事 始 光
な程やうの可ふも解の多縁火 未 費
おやめてまげをるなり小お礎 渡 来

奇水了けりて深し門の石 其翼
 秋立し夢のかげや露のる 米守
 柳の墨と片減りて年暮ぬ 暮菰
 空雲浮勢さぬく月夜 成章
 水音と露と静き夜の月 業頌
 山ありの古むを つもりの繁葉 旭高

りのやうに蓋乃言らけ燕るむ 可候
 夢梅やいとも存る勢 西翁
 親のまよなきをいふま首取 彦年
 朝影や旭と木の芽を候し夢 月杵
 けしこ日の色も嬉しお柳のま 藍山
 由をえ舞し人書らるる秋 柏翠
 秋のまよなきをいふま首取 彦年
 朝影や旭と木の芽を候し夢 月杵
 けしこ日の色も嬉しお柳のま 藍山
 由をえ舞し人書らるる秋 柏翠
 秋のまよなきをいふま首取 彦年
 朝影や旭と木の芽を候し夢 月杵
 けしこ日の色も嬉しお柳のま 藍山
 由をえ舞し人書らるる秋 柏翠

存てきふさふ扇やみりり銀河 溪宮
 夕のほや酒のたをいほをむき 素道
 徳書言や埃のたをいほをむき 嘉山
 蟻多るや里のたをいほをむき 其彭
 星合やあゆむるあまのたをいほをむき 魯雪
 絢爛のたをいほをむき 五渡
 秋風や野のたをいほをむき 涼花

山をゆくや金言ゆき 田乃星 梅契
 羽子のたをいほをむき 柳陰紅 象雄
 山にゆくや風をいほをむき 席角
 水に乾くや 妻の扇をいほをむき 弟角
 田をゆくや 花をいほをむき 其誠
 銀河と枯木と 月をいほをむき 未足
 まよふまの 野をいほをむき 松朗

田雀鳴や梅よとよよ日能句ひ
音のて燈るや秋乃故是乎
あふ火能外まをりるる
松原とくろらとんく落葉
箱の飯まは軒端や柳ぬく
女月や夕鉤まをりる
分前とたをれと嬉し奉作の秋

むら雨や水田くは月る
縁のいさひ昔志のけく
龍籠り葉とまらふや朝葉
尾やくまほむと能の異うれ
徐うれと代人携ふや杜若
まらすく痛よとく守渡
つとまてと志生て懶の御手式
荷灰の田りみらつるぬる

榮 熟

良 可

酒 能

欣 月

華 也

暁 臨

曲 川

為 山

冬 年

可 嘯

雪 年

暮 陽

山 英

山 台

弘 美

世よりあはれを言ふらむと沙去り
 穂も出さず山浅くなほ芒の如
 皆脱のふも洗ふく星並に
 芦沼乃なるはと枯く野の群
 星あひや月をさかよ香能月
 薄雪や梅の通じ路の中へ
 出されまゝの影を懐く難貴に
 身はあつても知らずと星の風

葱玉
 卓郎
 成位
 香城
 永機
 費乎
 蒼城
 為香

在菅籍

森くくやま山の虫城時なとら
 風すせととまきくらの鳴き声
 尔穂のまやと星並にと源の石
 組板も洗ふ山家や星むと
 曉のるりそとくやむく乃星
 人あはれを結と下路や障敷
 中々押のはつとや橋の雪と
 風をよきと鷗やと新秋

見外
 未曉
 等裁
 菅磨
 荷少
 然平
 窠曉
 真湖

在

家よりと吉くうらあふ泉の神 宇山
 初ありし岩のくけ口おとこゆふ 幽止
 水州の本よとせらむし野分は 幽止
 待ありし追分をさやあふのそを 幽地
 冬雪山の山もつて懸きの雪もけを 相富
 中流つる磯屋うつり細流 乙五
 水ゆりきくや野分の吹たふみ 範水
 ちねきくう煙もあふ葦の虫 好次

森つるまぬおのゆきお跡は 不染
 七夕や旅人せり磯歩り 永年
 水汲くはつる舟も散まられ 小雲
 梅のさく三合とけりぬ節。和 春泉
 更なる新なつて揺られまふの月 春室
 空の比すや風をそまはれもあふ 玄和
 工もあふあふにさるふ花火うれ 青南
 旅人乃言はく出。踊。う。木和

鳴る子守を木より風吹扇う如
 中つらも身とぬきり亮生身魂
 植木屋も木のるらまを杜
 老童もまをるるまを星
 名月や山川の鐘乃近う鳴る
 去くなく様を待らん松乃ぬま
 葬のゆり物嘆く人をもよおす
 下都もまをるる様を月夜哉

卜 早
 波 臨
 也 大
 留 木
 柳
 可 乙
 樹 石
 白 起

四巻

啼くはぬすしえもや月の虫
 むらゝく折戸は裁く蓑麦
 踊笠は又通し強あをる
 襦ろのせうふ冠を忘る
 あやふらゝ雪はらうつら日暮方
 よも木の葉を海に池底

五 休
 鼓 汀
 新 浦
 稔 市
 汀
 休

組内と名をよまざる一色と昔
茶しう葉乃字の物あや
徹立よからぬ一人はえの袖
たしくてまじ結納の品
小坂下町へ入るけと二本松
眼ふくたにまじり知れぬ言
白く獲りけし酒のむ羽月
苗香は葉の露まじり

市 浦 休 汀 布 市 休 汀 布 市

秋のちかは置入るあらしせ
法つきて来る称置の借財
山崎しう花の咲よへてまじり
苗代しう水の上をゆり
門もろろまじり日影は赤車
手拭しうて捲あげの髪
うま入よまじりまじり雨しり
川越しうまじり八幡の鐘

市 浦 休 汀 布 市 休 汀 布 市

ららあらし踏む影見せは舞うけ
踏む拾ふて財布いしく
金所取ら物志すあふ葉の相違
あふ日十かひ這入る蒸ゆる
うらあらしのさうらとよひぬきと
木葉渾りも夏ときしぬき
いさあよ月の光しるも孫の
あふいしく水引りむ
市 浦 汀 休 市 休

焼くよななれを赤かへや
病はの疲よ暑くも孫の
扶持取よさうこのまを海は新
あふもあふせら孫馬の細く
笑花よいさかあふの孫生を
あふいしく日影をぬきし帖
市 浦 汀 休 市



是法



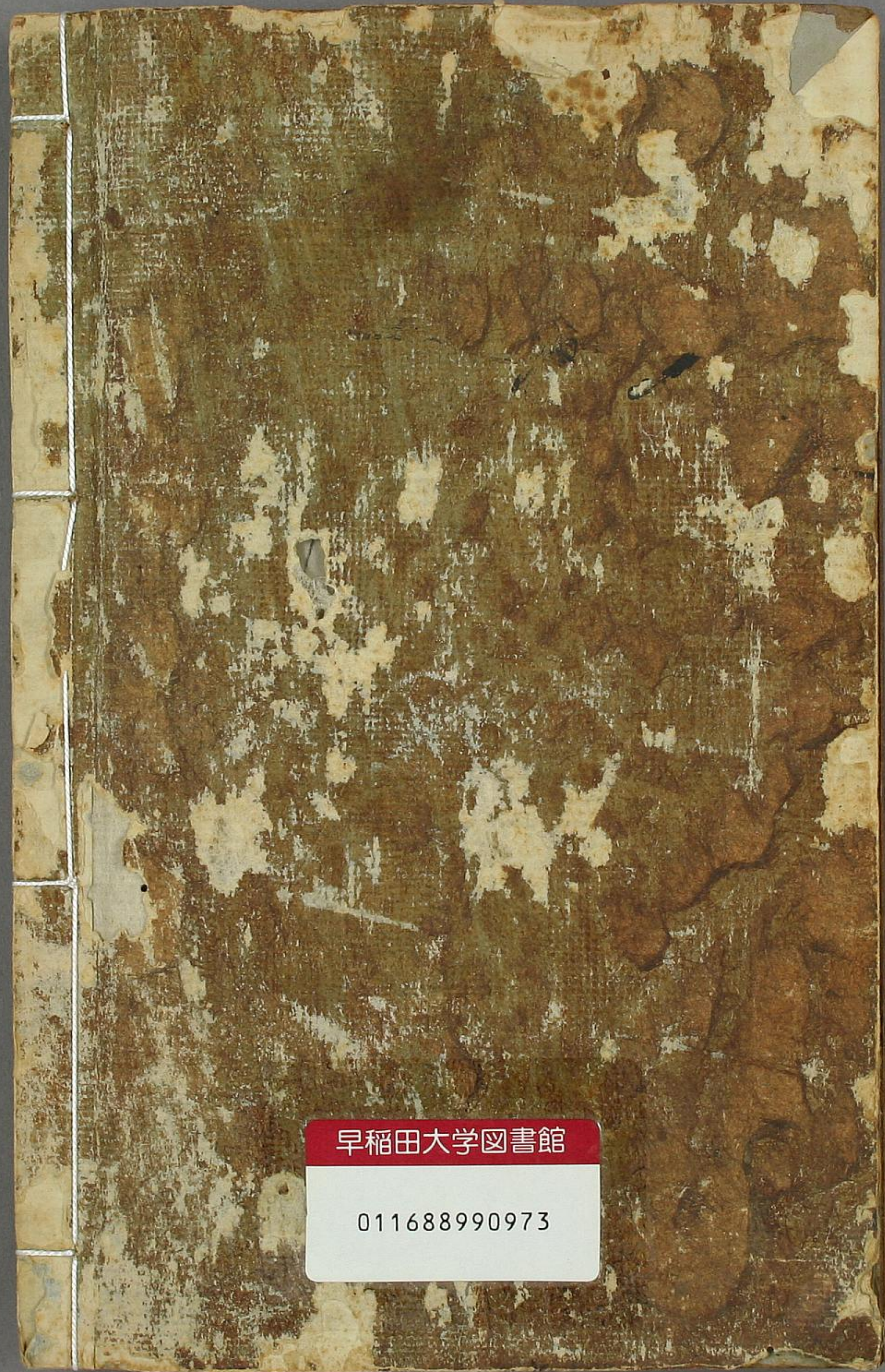
うしろのうしろのうしろのうしろのうしろ
 人ごとの群のもつれつてつるるる
 かしとたのよきとてゆきよとてゆきよとて

新甫
 鼓汀
 穂市

穂鼓のうしろのうしろのうしろのうしろ

この山舟をほくそつて花を教へて

手ごのせきほくそつていりて州
 五休



早稲田大学図書館

011688990973